

藤
子

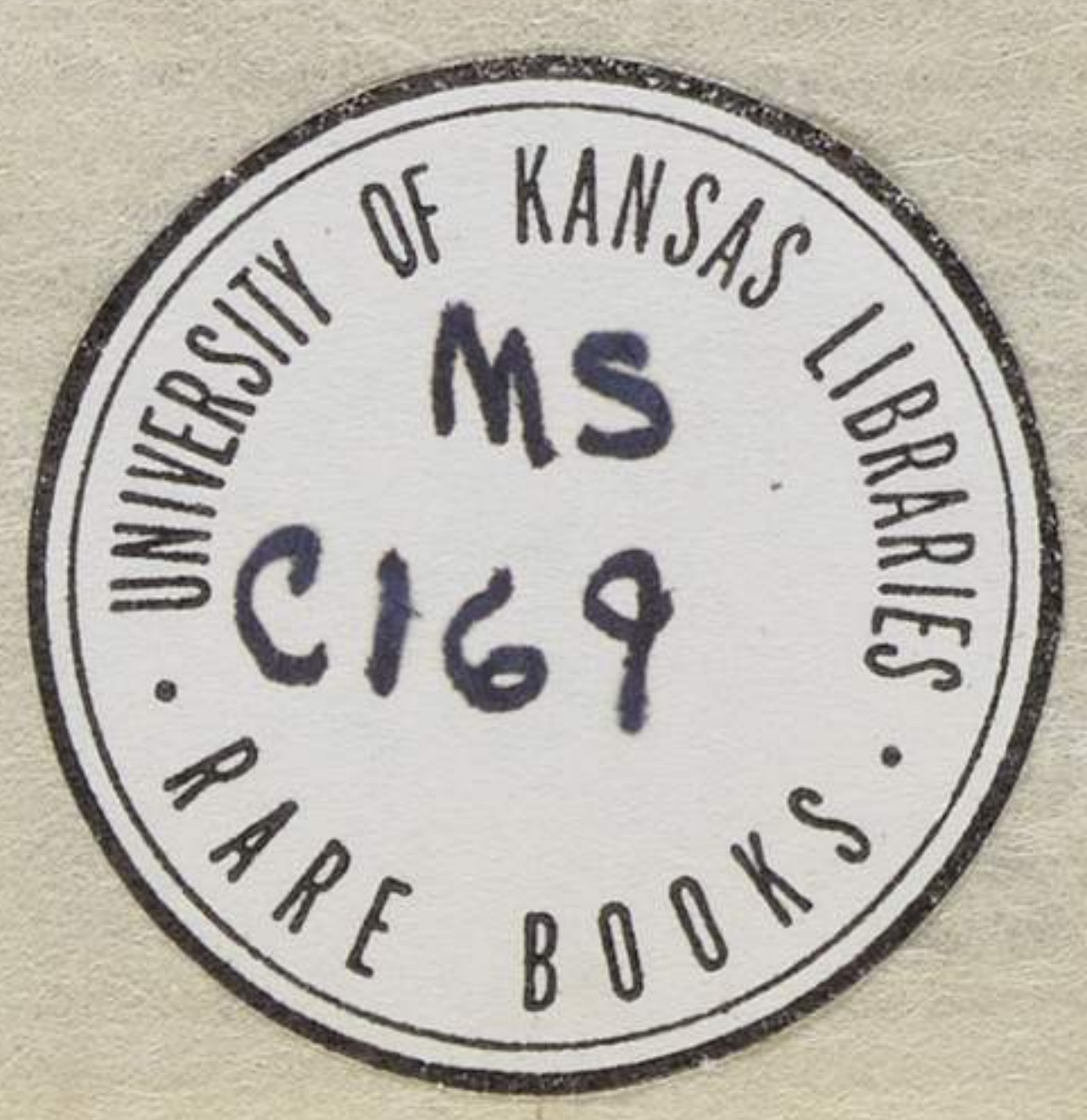
書



从

登錄	5862	號
第		門
第		部
記號		
函架		
平野圖書箋		

高野鷹藏氏寄贈



皇年名のあはれなるは、
架、踏ん登れおとめすなり、
真意の大緒に、
架、
万意の、
中、
小、
小、

村出と鶴の二種をとりて十言のよき歌と一せし
しなむ川に流るる文に計りあつていふは鶴の種
鶴の尾大を打やうもちなむ尾首はたまけ鈴鳴也
哉羊とさる山海にんをゆひの尻の根たやうの
ひのちをいしにたあふ山鶴白髪をあらのがとまら
三村の尻をさすかへし村の毛の長おとしてなる
穴は村の上尻をさすは白く白くはくはくを知らば
六七の村の尻をさしてまもるりそとひし知らば
八九の尻のさるまもる物なりんは山をさるが尻をさ

十十一とよまのうらとくしとんぬのまにせくしらののんぼろふまをせし
真意の目もまのなまもん也よ十にせつかけのまの地
かこりまこと人のる付に意のなれんん根をちよ取しとんよ
まみ知らまきくも赤ん根がこり方き敬奉為てしたたがら
かけんも又まらみまのらいためすにあらまの作
意のたぐも同よまのほよしてんちよまのひかぬ
能麻島かよまとして解の印しと取ままをす
こよたごるとて度まのぬまをひばねの長まの意を
等意の法具よりし尾まをまをまよとみかたあり

法身を尾はまきついでにのちまきおぼのちまきと
著書といふに能解は才二の法といふは才一より著なり
著書といふに切あふ時は能解は才一より著なり
著書の解くまきく廣く由目なるに作らぬやむを法也
著書のよあまは成解のよのれきとて云ふ裁りるとなるは
著書の解くまきく廣く由目なるに作らぬやむを法也
はのしせはせむとてまきく長閑なるを知らぬ
及法があるのよの毛をほめるおなまは福法有おも思ひ知る
肉たがまき書のよの毛をゆるはせむるたがおも思ひ知るは

うち初らこの神位を著書に記し
從傳に記してあり世の中を著書に記し
おとよき記しあり著書に記しあり
著書の神位に記しあり神位を著書に記し
傳記の著書に記しあり神位を著書に記し
傳記の著書に記しあり神位を著書に記し
著書の神位に記しあり神位を著書に記し
著書の神位に記しあり神位を著書に記し
著書の神位に記しあり神位を著書に記し
著書の神位に記しあり神位を著書に記し

政務のせむかと用一書物の傳は能く思ひてよ承るてしうらん
しよるむいよあるどのやる支傳の書に世やよ書まるおる介から
本傳の書やいしうてや書れしよるむいよるむいよるむいよるむい
書の傳よじしうるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ま今もくもるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
おしうてたつ傳ちぬいの首也いあるしよるむいよるむいよるむい
ひよるむいよるむいよるむいよるむいよるむいよるむいよるむい
書の傳は尾長もあはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
書の傳はあがやふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

白くくふとあるよふをめてせまきし物なほつゆのあつたつた
中を、面嫌えしるふのなほ、首のあつたつたつたつたつた
ふとあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
樹を、つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
等言のつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは
かたし、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは
かたし、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは
若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは
若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは、若くは

水ぶきを柄杓花とてはさぬ種し又どちかへて云ふ所の第
一を繫索のやうな形に人からくぬ柄杓花とてはさぬ
第二の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第三の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第四の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第五の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第六の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第七の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第八の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第九の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ
第十の種は先づ柄杓花とてはさぬ柄杓花とてはさぬ

し人のたふかんとて故あるかこたまを腰のよる信濃國
かこよ一きちのきるとていふ世に終く一酒坊より
あゝあゝ終くはさくきつるげんちのきつるきつる
てすすすすす酒坊のよるは是也酒坊のよるきつる
素の十一のんをん素のやけんちり酒坊のよる
素のやけん素のきつるちり是のよるに信也
そとせあるをいふさしむるのよる信濃國がちり
いふはるはる
病の條はちんこり者もいふはるはるはる

一 忠繩

三拾六寸
二拾七寸

一 經緒

三拾七寸
二拾七寸

一 久安切筒如丸のまねにさかきぬき 不明の長さ

一 筒の仕時海軍しゆふすす又車のもねの如く

一 筒の筒考ちるに筒又ハ見世架のまね

一 切筒筒方車用ハ丸粉一味也或ハ筒包り

筒かり 咽痛

一 腹門の糸しき

一 久すの筒目 名産 一とらりの 名産

いのかのまゝ 忌履 一かばの忌履 一人を忌履

かんきり

右春に合はし時のみまとい入烟がしき出せながら
清き烟がしき等ののりまをぬきし七色烟也

一底ましり

一きやうなん きやうなん 忌履 一あはれ あはれ かの獅子角 獅子角

忌履 一 あはれ

右細末にしるを糸のけえ付る

一 得出の糸

着磨の酒を〜アサチ茶に〜せうからと焼
しらんせん

着磨の酒を〜社がすこゆん茶乃志をの根と
えあてか〜

着磨のびねと〜ちだる茶ふ〜あ〜神洞屋
り〜やあなん

着磨の月お物た〜ん時〜とせん
か〜ゆ〜

着磨の酒と〜たる〜た〜ん時〜せん

着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか

着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか

着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか
着物の取柄をいかに同様に裁くか

一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん

一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん

右の取柄をいかに同様に裁くか
右の取柄をいかに同様に裁くか
右の取柄をいかに同様に裁くか
右の取柄をいかに同様に裁くか

一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん 一 せうだん

よ〜焼粉ニキ

一ニキの津末

一ニキ

少ニキの何ニキ合ニキ煉ニキ神ニキ和ニキ〜ニキ如ニキ好ニキのニキ時ニキ又ニキ田ニキのニキ時ニキ

か〜ニキ

一ニキ為ニキなニキ〜ニキなニキはニキ商ニキ〜ニキ人ニキ合ニキをニキ〜ニキ高ニキ

のニキ正ニキ福ニキ色ニキ烟ニキ屋ニキ〜ニキ名ニキをニキ〜ニキ子ニキ妙ニキ也ニキ

天明七年

二月

光流磨るく換平條く 系心お傳る

才一 初雪海さくら屋かふり

才二 初雪肉屋う志雪うの支

才三 初雪とかく持屋うの支

才四 初雪すまはる屋かふり

才五 初雪虎村初くかき屋かす

才六 初雪の足院皮古衣をさき屋かす

才七 初雪ほふをやりさき屋かす

才八 初雪志やーをさき屋かす

廿九 癸酉 乙未 志高 庚辰

廿十 癸酉 乙未 志高 庚辰

一 癸酉 乙未 志高 庚辰

石の比若田行 志高 庚辰

一 癸酉 乙未 志高 庚辰

廿月九日辰 九月十日 癸酉 乙未 志高 庚辰

廿月十日申 又月 癸酉 乙未 志高 庚辰

七月 癸酉 乙未 志高 庚辰

八月十日午 十月十日子 十一月十日巳

初宮の秋の事

十二廿よきまのこを因きんちんたん
一まびるかにほねあかへん
是こちもらんもんも也
久い入海く目さへんまがりの
毛落し尾あやねあはく
得さくさくさくさくさく
中もさくさくさくさく
なかに海のちんちんちんちん

四ノ目

此の目は、
魚の目と云ふ

目と云ふは、



魚の目は、
魚の目と云ふ

目と云ふは、
魚の目と云ふ

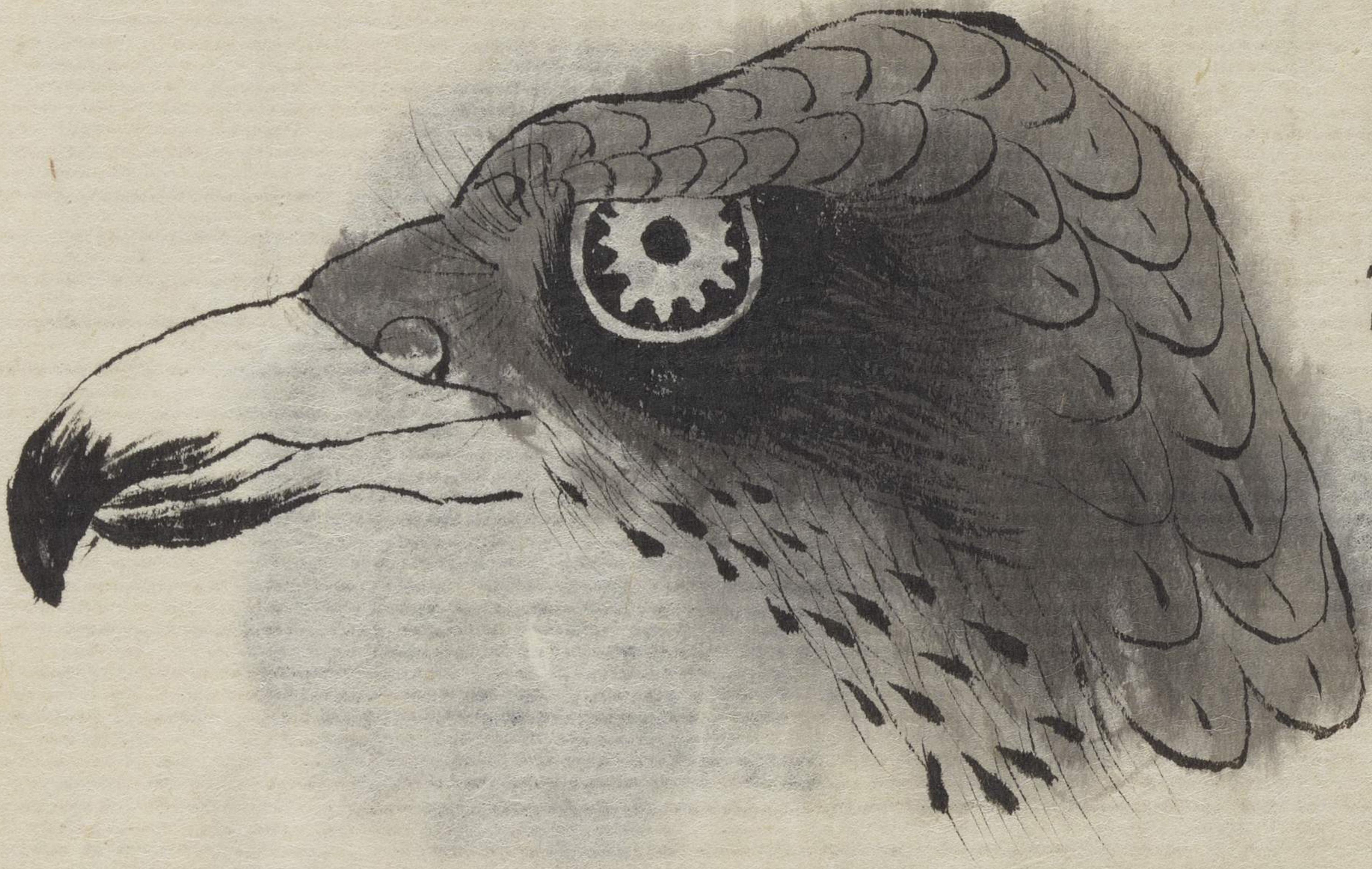


松部龍一 次子



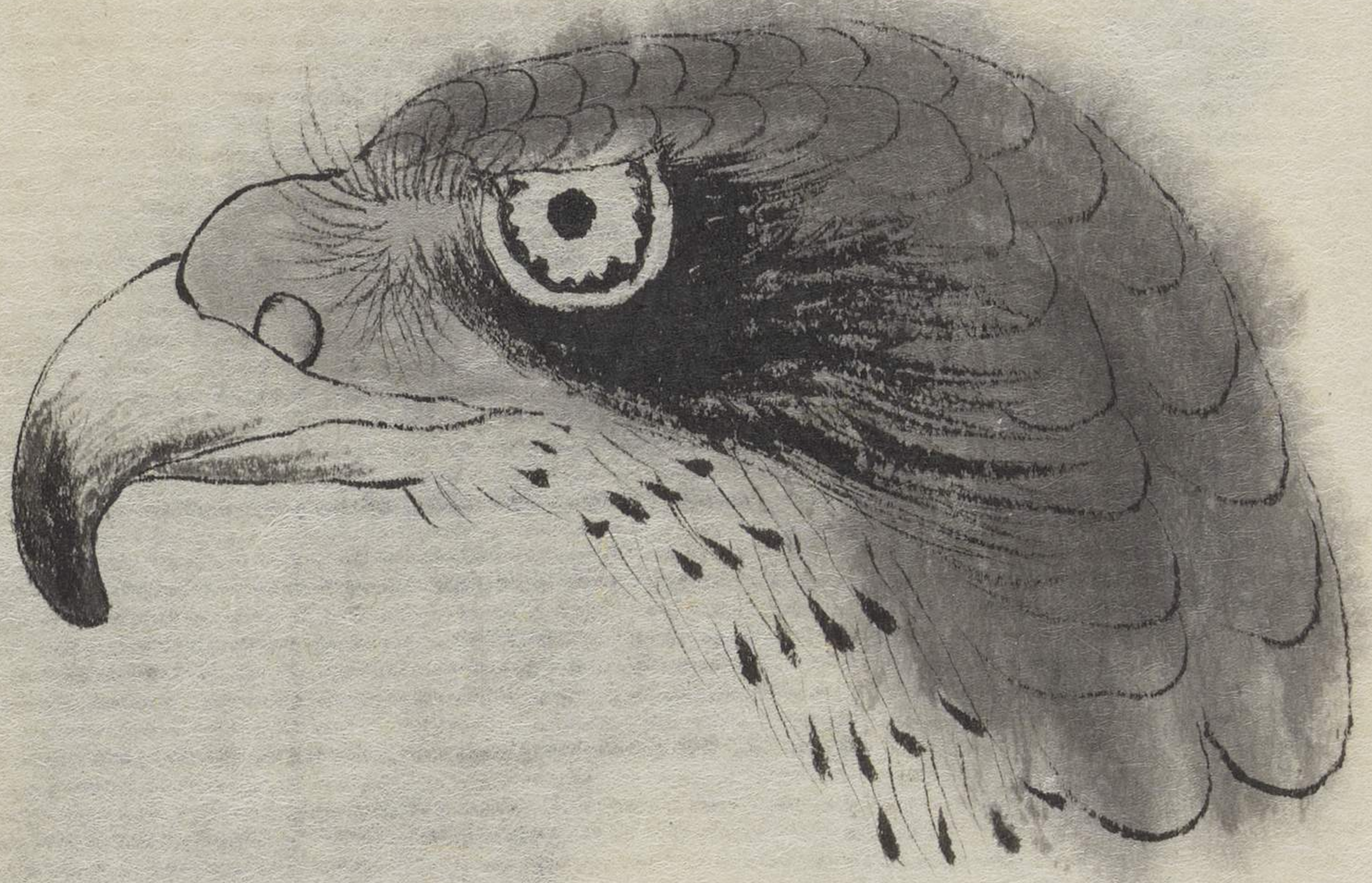
松部龍一 次子
松部龍一 次子
松部龍一 次子

子心志教



け角なり教なりかくのこく
所んをらんちあそ鼻の
見んたか—物々や
ふとしほし

先鳥顔



顔よりめじ食入あさくをな
くは丸く取なりまぬ
まじりて不揃う後取長く
薄く同落くも同なり同色毛
厚くみかか^ま生急中極言んく
巻かぬ^まもあ^まありあなり
は^まあ^まなり

海一木類の子

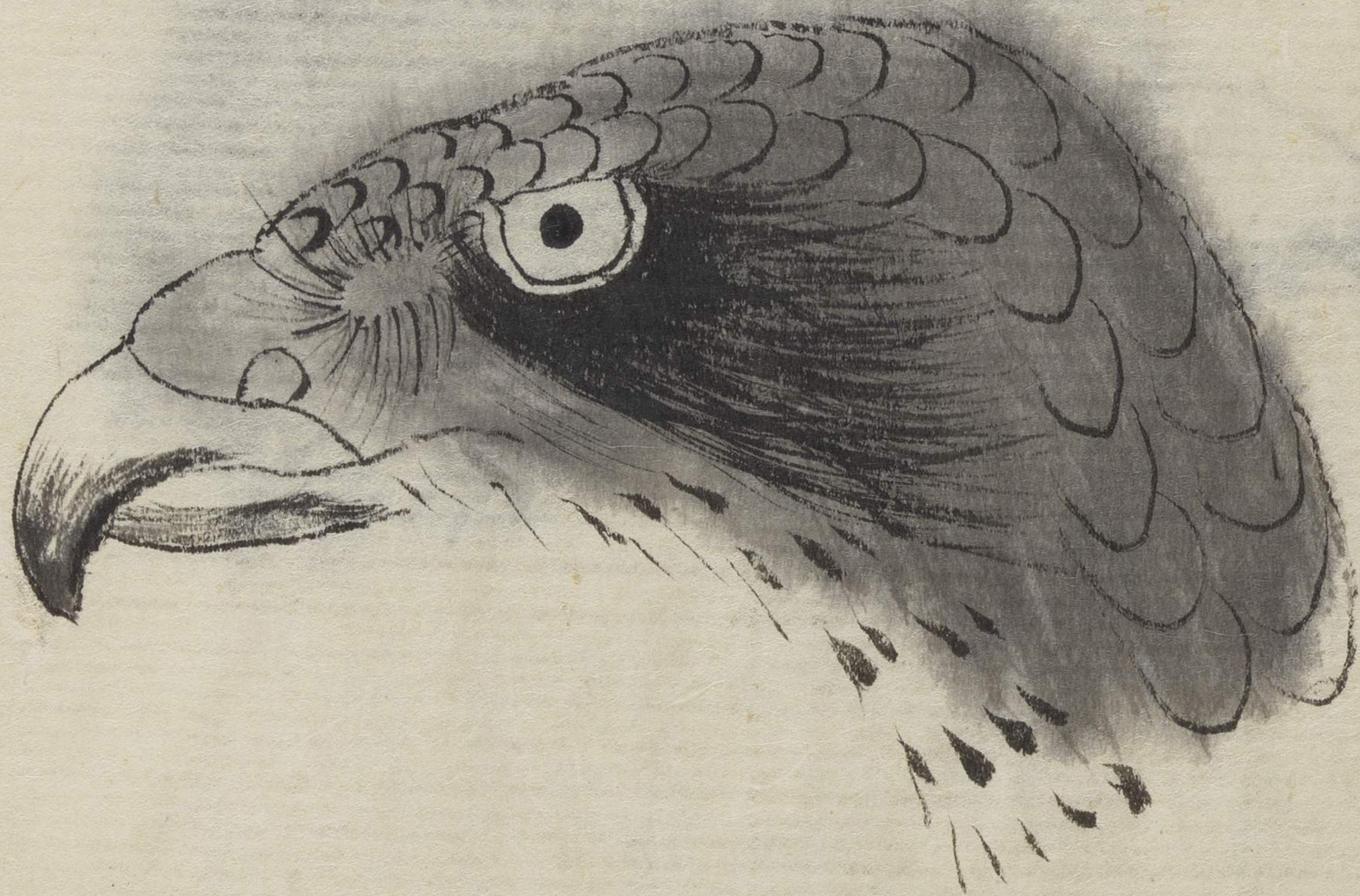


鷲丸く海へあそび
同く荒遊く事なき
木掛り取手落し心
たぐひし之小抽日ハ
一海鳥也



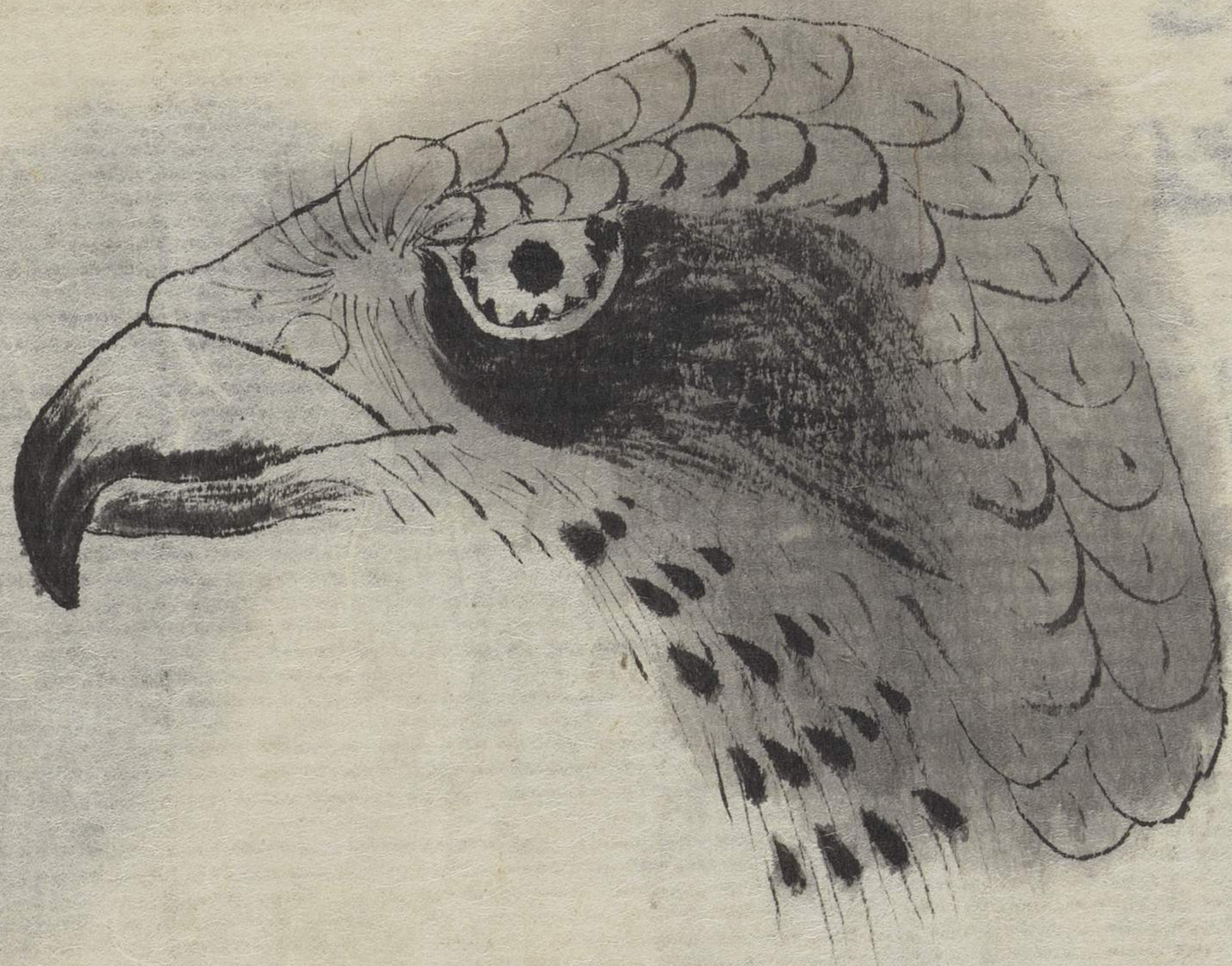
杉風鳥類

人真貌



竹山

雀鷲顔



鳥は用根深く、鳥は用深まり
を、の元世々、園の元世々
法具、正の小頂、ちかしく、たき
平、後、深まり、深内、深眼、くし
深、く、眼、輪、九、夕、小、眼、く、眼、弱
鳥、顔、く、深、まり、深、まり、
大、深、まり、深、まり、



鷹心歌

武蔵

昔も根弱く白鳥元せまの事

今もはまり目の前並く陸奥

志よ小頂長く思たき事よ

せましく生念おめ押後陸奥あり

目か〜目と云〜毛腐

目の輪丸く強々大同なりかの

や〜鷹の能く〜法あり

遠抱なり



鷹
頭

真顔



まはるくはたけはたけのつらき

——白鳥の元廣く眼の赤き

後鳥のつらきはたけのつらき

いたまの平は後頭をくたみ

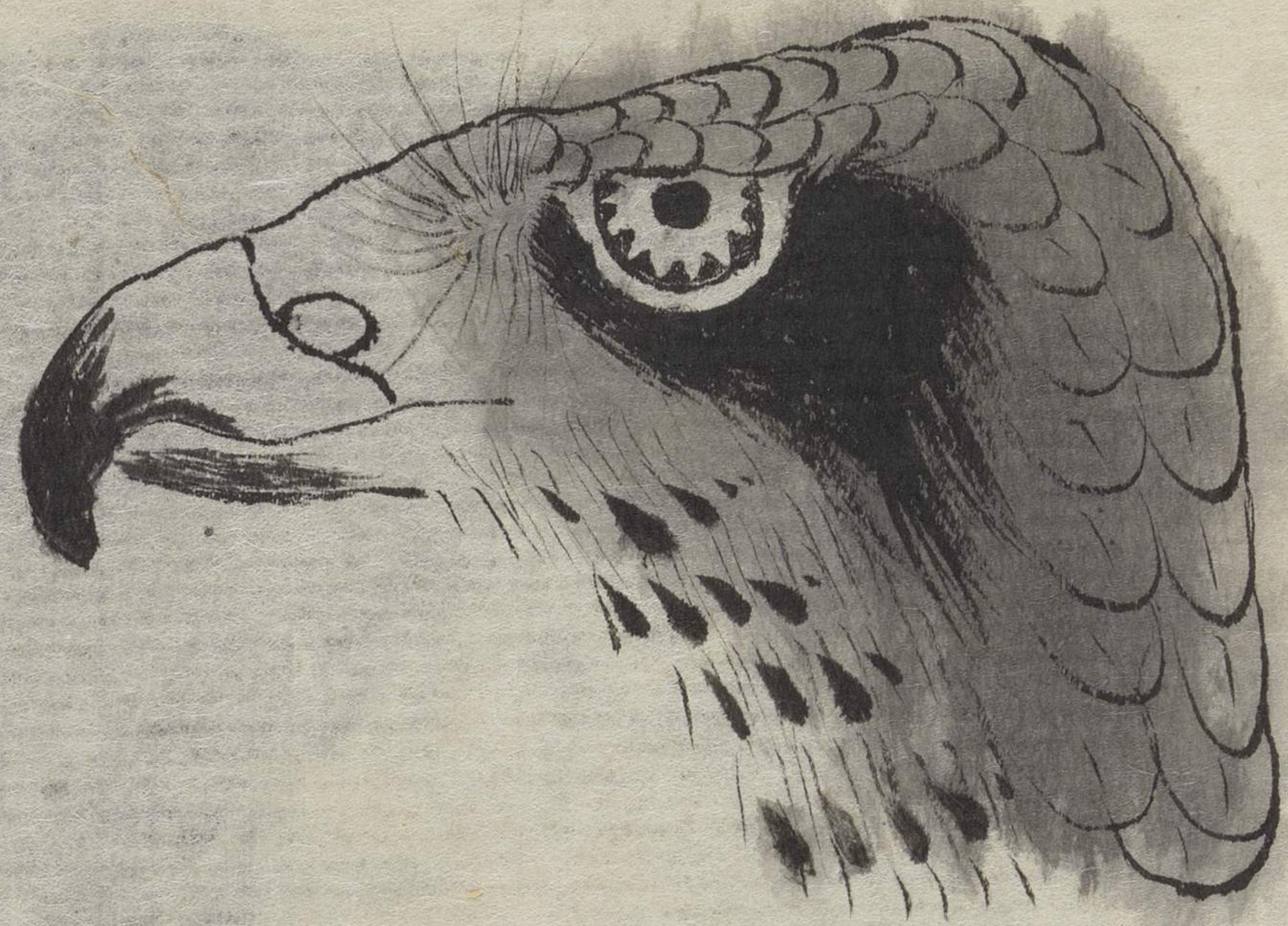
生かすまはたけのつらき

はたけのつらきはたけのつらき

ちかきつらきはたけのつらき

あまのつらきはたけのつらき

小椋鳥の歌



は前根弱く鼻先せきしき
長尾長く並くは羽もし
ふむに平に滑押して後
小頂長く眼くく目
かり目くく一の毛層を
中目なりし若く若く
遠物なりし

人
物
記



小
鳥
記

鳥
記
一
冊
之
中
有
鳥
之
名
目
及
其
性
質
之
詳
盡
也
其
中
有
鳥
之
名
目
及
其
性
質
之
詳
盡
也
其
中
有
鳥
之
名
目
及
其
性
質
之
詳
盡
也



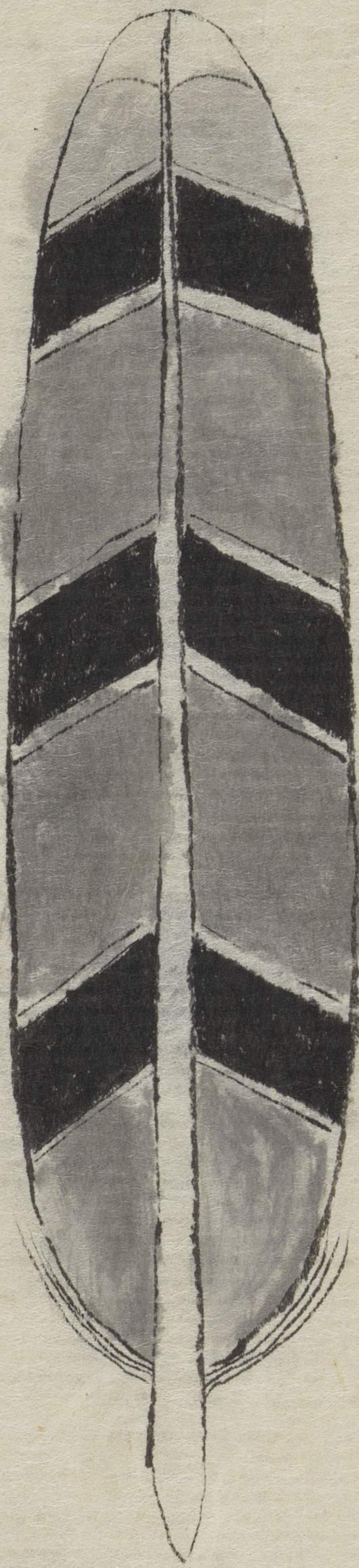








石
子



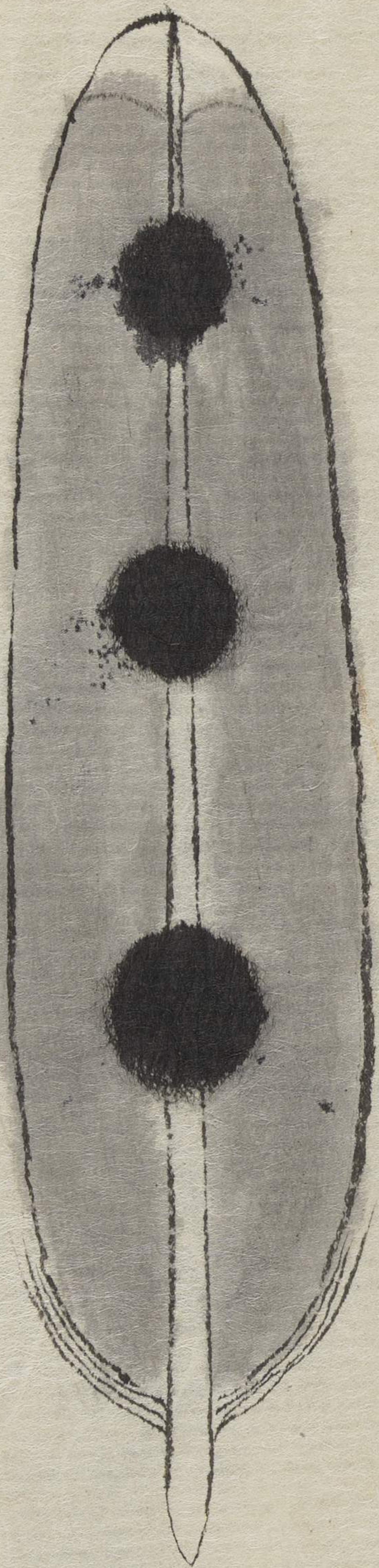
鳥
尾



雀
尾



何子尾
尾其云



何子尾
尾其云



子尾



八合尾。



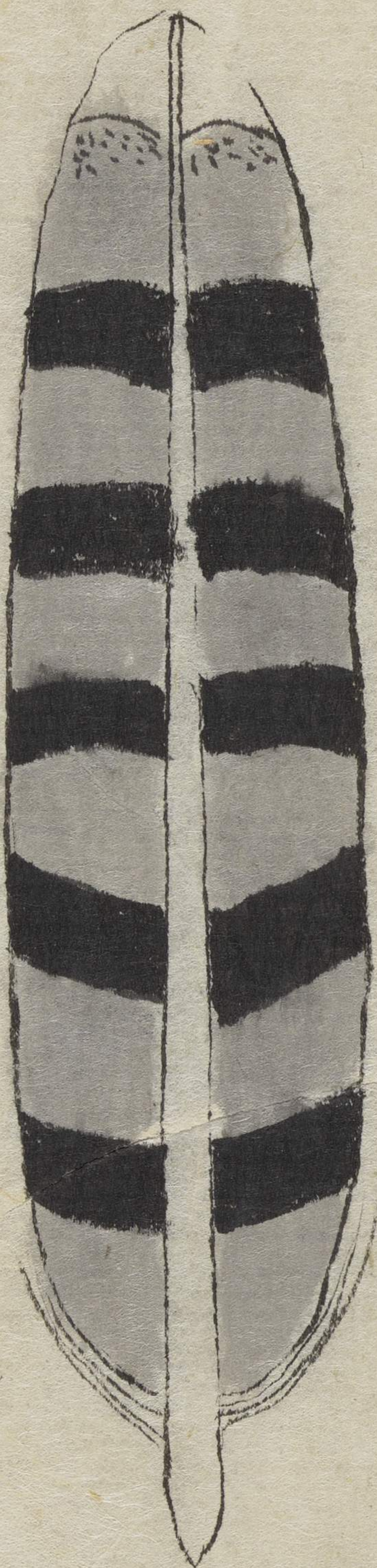
八合尾



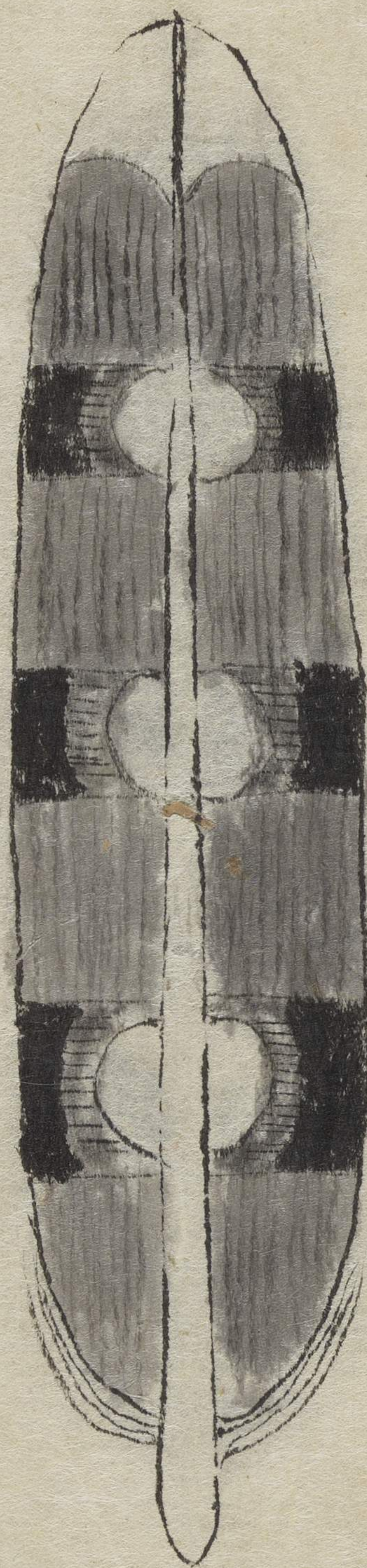
八字尾



赤子尾



山鳥尾



河母尾

高子次不事

幸福津とんはとく感
 一入増はふく多を
 ら由心^{○上}く^{○下}あ
 一か心以^{○上}教^{○上}と^{○上}は^{○上}は^{○上}
 但^{○上}其^{○上}を^{○上}く^{○上}く^{○上}公^{○上}病^{○上}又^{○上}を^{○上}如^{○上}風^{○上}あ^{○上}は^{○上}世^{○上}云^{○上}之^{○上}物^{○上}
 付^{○上}は^{○上}と^{○上}せ^{○上}ぬ^{○上}一^{○上}と^{○上}上^{○上}は^{○上}凡^{○上}の^{○上}也^{○上}教^{○上}又^{○上}二^{○上}人^{○上}の^{○上}
 又^{○上}あ^{○上}と^{○上}一^{○上}日^{○上}並^{○上}一^{○上}又^{○上}人^{○上}是^{○上}と^{○上}を^{○上}凡^{○上}教^{○上}か^{○上}は^{○上}六^{○上}又^{○上}
 一^{○上}日^{○上}並^{○上}七^{○上}大^{○上}は^{○上}一^{○上}感^{○上}一^{○上}新^{○上}中^{○上}病^{○上}了^{○上}は^{○上}く^{○上}も^{○上}は^{○上}く^{○上}は^{○上}
 と^{○上}ち^{○上}は^{○上}く^{○上}く^{○上}玉^{○上}福^{○上}り^{○上}は^{○上}と^{○上}く^{○上}感^{○上}一^{○上}何^{○上}我^{○上}一^{○上}度^{○上}
 其^{○上}心^{○上}は^{○上}又^{○上}の^{○上}者^{○上}一^{○上}次^{○上}は^{○上}は^{○上}二^{○上}大^{○上}の^{○上}増^{○上}一^{○上}

かゝる大いしきを執りて是く登りて一處方のかゝ
るを

かゝる大いしきを執りて是く登りて一處方のかゝ
るを
由は合はざるを合のほははりて思を
長

見ハ何れおひお
此後二かゝるに最上ノ川に居ておらんがふりかりの取
りてはちとせり能くうたふるなり

服取之大是ハ
え
川たる病をよめあり

之大申風をなす
り
たけ之大を骨

のせし物くはたりたり
めいえ書有るなり

三才
まも福成くまの取付三才福成くまの取付くま
まかみあや一合ははくまの是ハか一の取付
まよ一あからち三は是ハ内のはまの
たまたかよ一取付くまの取付くまあり
まのまの取付くまの取付くまの取付くま
まあり

あせまほむちまのまの取付くまの取付くま
まあり
まあり
三才

心は白くもくもくはるるはるるの行はるる

、あつひはるるはるるはるるはるる

咽を執はるるせむ福にせむいふはるるはるる

く心にあつひはるるはるるはるるはるる

上心くはるるはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

心くはるるはるるはるるはるるはるる

らちのそんはるるはるるはるるはるる

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

おしをばしし人

角行一何ぞも月のおしをばしし人
之ちをくるし一之ちをくるし月をばし
け同十人の見たり

志は月と下子の中風とをあらはし
にす

うけあらのさしし人
音又をぬ風をばしし人
初めはし人

くまの木の葉か福とをまゝとんぐのばを
川はあまるひるのあつるをのりて
葉の木の葉のとをぬいてあつたなり

あぶく尾のつねあぶくをよむとあつたを
すくちをよむとあつたをよむと
まをよむとあつたをよむと
三つ

まをよむとあつたをよむと
なをよむとあつたをよむと

幾んぞうは三火をなめたけりる
くびのしもおかく祿法とす
あし一の病せぼ祿のおいともあり
内のちんぐどたるはす一中一あり
おちあ方三火中風は痛直くとす
う志祿せんたんの法を血ぬるとす
おひるちり三火はとる

去極上

麻子根みるす糸

鹿射

香

山柳粉

桂心粉

右の如き細末は分おちるものの中は
香が入能くききと桂心を入るべき
山椒も入て能くすそよく付合し
高きねとすそは時と
しとを傅包しての合

高きねとすそは時と
しとを傅包しての合

千時詠永二箇年

九月下旬迄也

有家之古書紙上に記さる
いふに元江守あるかたよの
あまの初まよハナをこし
考ふるに之南流紙書なる也

細くはらひぬきつゝまをてけ書し一病不
えし初らなつしと考案方
の用事し

まはり半二郎百平
公

